

# 武井蔵 「長享二年六月三十日十六首和歌御当座」 — 略解題と釈文 —

武井和人  
日高愛子

## 【略解題】

『八木書店古書目録 古典文学特輯』七四号（二〇一四・一〇）、以下『目録』に、以下の二点の歌会資料が掲出された。

237三十首和歌詠草ほか 江戸後期写 一冊 二五〇、〇〇〇

改表紙、題簽欠、27×19・5糎 五部の和歌詠草等を収める和歌合

集。「三十首和歌詠草」（加筆俊成卿 作者家隆卿）「三十首和歌御当

座」「長享二年六月廿六日和歌御当座」「詠三十首和歌」（飛鳥井雅章

卿）。写真版21頁参照

238長享二年六月詠三十首和歌 近代写か 一冊 三〇、〇〇〇

改表紙 題簽欠 六丁 26・4×18・8糎

『目録』四四頁

幸ひ、両書ながら入手することを得たので、小論にて紹介したいと思ふ。

『目録』を一瞥しただけにそれかと推してゐたことではあるが、

入手して精査してみるに、やはりこれらはともに、井上宗雄旧蔵本であつた。なんとすれば、井上『書架解体 王朝和歌から中世和歌へ』

（笠間書院、二〇一〇・一〇）に以下の記載を見るからである。

『三十首和歌詠草』

十五首一ヶ度、三十首四ヶ度所収の和歌合集。家隆三十首（俊

成評点、「たをやめの」以下。補遺（4）に翻刻する）、文明十

六年九月十五日三十首、長享二年六月廿六日十五首歌会（三十

日とも）、豊原統秋三十首（実隆点）、飛鳥井雅章三十首（補遺

（4））。なお「長享二年六月会、雅章三十首」のみを録した福

井本がある。『書架解体』一四六頁）

ここに指摘がある「補遺（4）」から、小論に直接かかはる部分

を抄記すると、次の如し。

## 4 「三十首和歌詠草 ほか」

五部の和歌詠草等を収める和歌合集。袋綴一冊。二六・八×

一九・六糎。江戸後期写。紺無地の表紙に題なく、内容を加味

して上記の如き仮の題を付けておく。後表紙の裏に一枚（表の

み）がのりづけにより加えられている。（中略）

(3) 「長享二年六月廿六日和歌御当座」。

志かの浦や春の面かけたつ波の白ゆふ花にあさのゆふして

以下、尚隆・政広・尚胤・敏康<sup>(廉)</sup>・宏行・御詠・政行。十五首。

「常徳院集」364に「六月つくる日歌合し侍しに、名所夏祓

判者予」として右の歌が見えるので、催行が長享二年六月三十

日であることが知られる。なお「御詠」も義尚の歌であること

が家集三六五〇九に見える。福井本に、この「長享二年」の歌

会歌と飛鳥井雅章の「詠三十首和歌」(「立春 しろこしの空も

へたてぬ日の本の光にけふや春はたつらん」以下。すべて十六

首)と合せた一冊があり、それによると、この会は「長享二年

六月卅日十六首和歌御当座」とあり、日が喰違っている。前掲

の「三十首和歌詠草」本について右の会は、端作り題の「六月

廿六日和歌御当座」の「廿」が何かの字の重ね書きとなってお

り、或は、親本に「六月卅日十六首」とあったのを誤写したの

ではなからうか。更に上掲本<sup>(マ)</sup>7は十五首しかないが、福井本で

は七首目に「泉辺待人 政行 我のみはあたら清水の夕すゝみ

心を くみてとふ人もかな」があり、十六首。この福井本は、

新写本だが、浅倉屋書店の売價札に「飛鳥井雅章卿 写」とあ

り、おそらく欠歌のない雅章筆本か何かを写した本なのであ

う。本文の比較検討など、将来の検討課題であらう。なお井上

「長享二年六月三十日十六首和歌御当座―歌会か歌合か―」(和

歌史研究会会報94、昭63・9)で述べたが、常徳院集に「歌合」

とあるのは、歌会歌十六首を歌合(八番)に番えたのではな

らうか。(一六二―一六三頁)

ここで指摘されてゐる井上「長享二年六月三十日十六首和歌御当

座―歌会か歌合か―」(和歌史研究会会報九四、昭六三・九、以下

「井上論」)を参看するに、そこでは二つの典籍が紹介されてゐる。

一つは、『書架解体』に「宣胤卿 ほか」として掲出されてゐるも

の(同書一四五頁、一四九―一五三頁)。いま一つが、『目録』二三

八番の典籍であり、即ち井上がいふ福井本である。井上論には、福

井本による釈文も掲載され、『書架解体』よりもやや詳細な論証が

なされてゐる(後文にて引用しつつ、私見を述べてみたい)。

○

まづ両本の小論における書名を仮に決めておきたい。

『目録』二三七番の典籍については、井上が示した通り、「三十

首和歌詠草 ほか」としたい。『目録』二三八番の典籍については、

井上自身による命名がないので、『目録』の書名を襲ひ、「長享二年

六月卅日十六首和歌御当座／詠三十首和歌」としておく。

○

〔三十首和歌詠草 ほか〕の書誌は、『書架解体』に概ね報告さ

れてゐるが、なほ補ふべき点があるので、以下略述する。

料紙は楮紙。若干の蠹蝕あるも、裏打ちにより補修がなされてゐ

る。全巻一筆と目される。遊紙は存せず、墨付は計一四丁、その内

訳は、

三十首和歌詠草〔加筆 俊成卿／作者 家隆卿〕

……一丁表―三丁裏

三十首和歌御当座年月可尋

……四丁表く五丁表

※四丁裏く五丁表に、井上の筆による「表面」文明十六、

九、十五打聞抄 三十首当座（鉛筆書き）／「裏面」ココ

カラ終リマデ（朱筆）なる付箋が挟み込まれてゐる。

長亨<sup>(マ)</sup>二年六月廿六日和歌御当座

……五丁裏く六丁裏

※六丁表一行目に、井上の筆による「一首アリ（政行）」なる鉛筆書きの書入れが存する。

詠三十首和歌年月不知逍遥院實隆公点／作者 豊原統秋

……七丁表く一二丁表

詠三十首和歌 飛鳥井雅章卿

……一二丁裏く一四丁裏

※一四丁表、二行目と三行目の間鼈頭に、井上の筆による「逢恋V」なる鉛筆書きの書入れが存する。

後表紙見返しに別筆（やや時代が下るか）による以下の書入れが存する。

輦車宣旨事

近衛司事

弘安十一年即位公世卿記

着禮服次才

近衛司装束

立后人と装束

秘と

なほ「三十首和歌詠草 ほか」のことが、井上論に全く触れられてゐないところから推すに、井上がこの書を入手したのは、井上論

発表後、平成になつてからなのであらう。

○

〔長亨二年六月卅日十六首和歌御当座／詠三十首和歌〕の書誌に關しては、『和歌史研究会会報』の井上論に「縦二六、横一八センチメートル余りの楮紙袋綴本で丁子引の表紙が付せられ、外題はない」とあるのみなので、やや詳しく以下に記しておく。

法量は二六・二×一八・六cm。料紙は楮紙。ごく稀に蠹蝕あるも、裏打ちにより補修がなされてゐる。全巻一筆と目される。表紙は、格子文様の丁子引。装丁は近代で良いかと思ふが、書写年代も井上がいふ如く（そして『目録』も同様にいふ如く）近代と断じて良いか、判断出来かねる。あるいは、江戸極末あたりまで遡りうるかとも思ふ。蠹蝕がやや進んでゐることも、近代と断ずるにはやや躊躇される要因の一つである。

このやうに、書写時期はあるいは近代かと思はれるほど新しいものであるが、その筆跡は江戸期のもの（それに限定を加へれば、堂々たる公家様のそれ）と見紛ふばかりであつて、親本を忠実に透き写した（乃至臨写した）ものかと想像される（後掲図版参照）。

遊紙は存せず、墨付は計七丁、その内訳は、

長亨二年六月卅日十六首和歌御當座

……一丁表く三丁表

※第一丁裏、政行歌（「我のミハ」）の鼈頭に、井上の手によるものと思はれる鉛筆書きの「V」が存する。

詠三十首和歌 飛鳥井雅章卿

……三丁裏く七丁表

※第七丁は後表紙の見返しとして貼り付けられてゐる。

○

本歌会の成立事情に関しては、『和歌史研究会会報』の井上論に基本的な問題点が指摘され考察がなされてゐるが、小論でも井上論を踏まへつつ略述しておくこととする。

まづ参看すべき重要資料は、義尚の家集である『常德院集』である。いま、新編私家集大成より該当個所を引用すると、以下の通りである。

六月つくる日歌合し侍しに、名所夏祓判者予

志賀の浦や春のおもかけたつ波の 白ゆふ花に麻のゆふして (三六四)

路納涼

夏ふかき山路の夕日色くれて 秋にすゝしきならの下陰 (三六五)

欲迎秋近

今そ聞まかきの荻のさよ更に 一はのそはん秋。風かは (三六六)

寄風恋

うらめしや恨やりても吹風の つてをいかにとゝはゝこそあれ (三六七)

寄草恋

しはしとて結ふ契りは枯行に 秋まつ草よしけらすも哉 (三六八)

天

わか心くるらしと思道よりそ 天つみ空も清くてらせる (三六九)

早

四方にみつ星のやとりに雲の腰 はやふき帰し空もはれなん (三七〇)

新編私家集大成の底本は、国立歴史民俗博物館蔵高松宮本「常德院詠」〔H・六〇〇・四六九〕。

この六首ながら、本歌会での義尚詠と一致する（本文に細かな違ひはあるにせよ）。従つて、歌会の日時は、「長享二年六月卅日十六首和歌御当座／詠三十首和歌」の端作題にある「長享二年六月卅日（十六首和歌御当座）」が正しいといふことにならう。

最大の問題点は、『常德院集』が「歌合」とする（この記述は、『大日本史料』においても用ゐられてゐる）のに対し、両資料ともに「歌合」と位置付けられてゐる点である。仮に闕脱歌がない「長享二年六月卅日十六首和歌御当座／詠三十首和歌」の詠歌を以て結番しようとしたとしても、「名所夏祓・浦納涼、路納涼・朝納涼……」ということになり、これらはまあよいとしても、欲迎秋近・寄風恋、寄書恋・天という番はいかにもおかしい。しかも欲迎秋近・寄風恋は共に義尚の詠である（前引井上論）から、不自然さを免れないのである。

ここらあたりの事情は、井上が「もとの形はここにみるように側近と行った歌会だったのでなからうか。それをそのままの形で歌合に結番したか、あるいは適当に題・歌を加えて結番して歌合としたか、であろう。そして常德院集という日次歌集の詞書に、「歌合し侍しに」とあるから、即座に（あるいは歌会後まもなく）歌合にしたのではあるまいか」と推すところが実情に近からうと思ふ。

ただし、この推論は、現行の『常德院集』が該歌会の詠歌をすべ

て収めてあるといふ前提で進められてるのであり、末尾部分にさまざまな増補・改編が認められるといふ『常德院集』であるから、出詠歌がすべて『常德院集』に採録されえたかどうか、そのあたりからしてそもそもが確定的ではないといふ見方も出来よう。従つて、いまある詠歌だけで結番した時の不自然さは、あまり訝しく思ふ必要もないかと考へておくこととしたい。

なほ、『常德院集』の本文について、井上が「題の内「星」は流布本の家集には「甲」とか「早」とかある」と述べ、本歌会資料の優れてゐることを暗示してゐる。

念のために、管見に入つた『常德院集』の当該部分を示してみる

国立歴史民俗博物館蔵高松宮本「常德院詠」〔H・六〇〇・四

六九〕\*新編私家集大成底本

↓「早」

『大日本史料』第八編之二十二・長享二年六月三十日条所引『常德院集』（底本未詳）

↓「甲」

宮内庁書陵部図書寮文庫蔵「常德院詠」〔五〇一・七九〇〕

↓「星」

祐徳稻荷中川文庫蔵「月次会歌合」〔六・二二一・二八六〕

↓「早」

祐徳稻荷中川文庫蔵「義尚公常德院殿家集」〔六・二二一・二四九〕

↓「早」

肥前島原松平文庫蔵「常德院御集」〔一三七・一一〕

↓「甲」

となつてゐて、確かに本歌会資料の本文の方により安定感があることを否めないものの、さまで称揚することはあるまいと思ふ。

○

最後に、作者について、忽卒の調査ではあるが知り得たことを摘記しておきたい。

井上論では「尚胤・敏廉については未考」としてゐるが、尚胤は東尚胤であろう。『大日本史料』長享元年九月二十八日条に、

九月廿八日、早晨正宗（龍統）和尚有書、告曰、俗姪東三郎賜府君之字、

而有所領下知云々、依少弼彈正請之、故謝予者也、（大館尚氏）（鹿苑日録）

とあり、義尚より偏諱を与へられたことが知られる（寛政重修諸家譜）によれば、初名、守胤）。次に示した、『再昌草』大永三年（一五二三）条の四五〇三番歌も尚胤のものか（傍点引用者）。

武蔵国淵江より、東下総守胤書状に 九月状也

あつまちや風のたよりのことの葉は 行多いかにといつかきか  
まし（四五〇三）

返し 十二月十遣也

このの葉はめにみぬ風の便ありと 聞わたりてそ月日へにける  
（四五〇四）

一方、敏廉について、井上『書架解体』では「敏康」とする。敏康といふ名は、『大日本史料』延徳二年十一月十八日条に見える。

廿八日、（十一月）午、晴、（町）中公方御代官野野・二階堂・波多野以下数（敏康）

輩參地藏、此間連日奉公衆參之、千度毎と有之、(晴富宿禰記)  
足利義規(一四三九〜一四九一)の平癒祈願を二階堂尚行(尚行もまた義尚から偏諱を与へられている)らと共にを行ったといふ内容で、時代的にも一致する。ただし、今のところ詠草資料には名を見出せず、義尚との関係など、未詳とせざるを得ない。

### 【備考】

小論執筆の分担は以下の通り。

略解題礎稿……………武井(日高追補〔特に作者考証〕)

釈文礎稿……………日高(武井追補〔付箋、書入れ等〕)

版下稿作成……………武井(日高点検)

なほ、相互に礎稿全体を検討して、補訂を加へてある。

小論は、「室町後期歌会資料の総合的研究」(平成二六年度・科学研究費補助金・基盤研究(C)「二六三七〇二〇〇」、研究代表者〓武井)による研究成果の一部を含む。

### 【凡例】

(1)漢字は原則として通行の字体に統一した。

(2)丁移りを、「一・一」の如く示した。

(3)上句と下句の間に、一字分空白を設けた。

(4)和歌に闕脱がない〔長享二年六月卅日十六首和歌御当座／詠三十首和歌〕の方に、わたくしに通番号を冠した。

【釈文】

〔長享二年六月卅日十六首和歌御当座／詠三十首和歌〕

長享二年六月卅日十六首和歌御当座（端作題）

名所夏祓

義熙

1 しかの浦や春の面かけたつ波の 白ゆふ花にあさのゆふして

浦納涼

尚隆

2 あつさ弓矢はしのうらの夕風に かへるさしらて涼む比哉

\* 井上釈文、第二句冒頭、「矢はた」ニ作ルモ、誤。

路納涼

義熙

3 夏ふかき山路の夕日色くれて 秋に涼しきならの下陰

朝納涼

政広

4 すゝしさはおなし水まく木の下に 朝日まつ間の秋かせそふく

夕納涼

尚胤

5 夕まくれ秋もまちかきあしかきの 下ふく風の音そすゝしき

滝下納涼

敏廉

6 山風も袖に吹落てすゝしきは まさるいはねの滝のしら波

〔三十首和歌詠草 ほか〕

長享二年六月廿六日和歌御当座（端作題）  
(ママ)

\* 「廿」字、重ネ書キサル。元字不明。

名所夏祓

義熙

しかの浦や春の面かけたつ波の 白ゆふ花にあさのゆふして

浦納涼

尚隆

あつさ弓矢橋のうらの夕風に かへるさしらてすゝむころかな

路納涼

義熙

夏ふかき山路の夕日いろくれて 秋そすゝしきならの下陰

朝納涼

政広

すゝしさはおなし水せく木の下に 朝日まつまの秋かせそふく

夕納涼

尚胤

夕まくれ秋もまちかきあしかきの 下ふくかせの音そすゝしき

滝下納涼

敏廉

山風もそてに吹落てすゝしきは まさる岩根の滝のしらなみ」一

泉边待人

政行

7 我のみはあたら清水の夕すゝみ 心をくみてとふ人もかな

〔コノ歌闕〕

\*コノ歌ノ鼈頭ニ鉛筆ニテ「V」トアリ

\*ノド鼈頭近クニ鉛筆ニテ「二首アリ（政行）」トアリ

対扇忘夏

宏行「一

対扇忘夏

宏行

8 露もまたをかぬ程より手にならす 扇の風の秋そみにしむ

露もまたおかぬほとより手にならす 扇の風の秋そみにしむ

欲迎秋近

義一照

欲迎秋近

義一照

9 いまも聞まかきの荻のそよさらに 一葉のそはん秋の風かは

いまもきくまかきの荻のそよさらに 一葉のそはん秋の風かは

寄風恋

御詠

寄風恋

御詠

10 うらめしや恨やりても吹風の つてをいかにととはゝこそあれ

うらめしや恨やりてもふく風の つてをいかにととはゝこそあれ

寄草恋

同

寄草恋

同

11 しはしとてむすふ契はかれゆくに 秋まつ草よしけらすもかな

しはしとてむすふ契はかれゆくに 秋まつくさよしけらすもかな

寄木恋

政行

寄木恋

政行

12 しられしな袖のしくれに猶たへて 心の松も色にいてねは

しられしな袖のしくれに猶たへて 心のまつも色にいてねは

寄書恋

同

寄書恋

同

13 うはの空に数かく雁の玉章は いかにたのまん忍ひわふとも

うはの空にかすかく雁の玉章は いかにたのまん忍ひわふとも

天

御詠

天

御詠

14 わか心くもらしと思みちよりそ 天津みそらはきよくてらせる

わか心くもらしとおもふみちよりそ 天津みそらはきよくてらせる



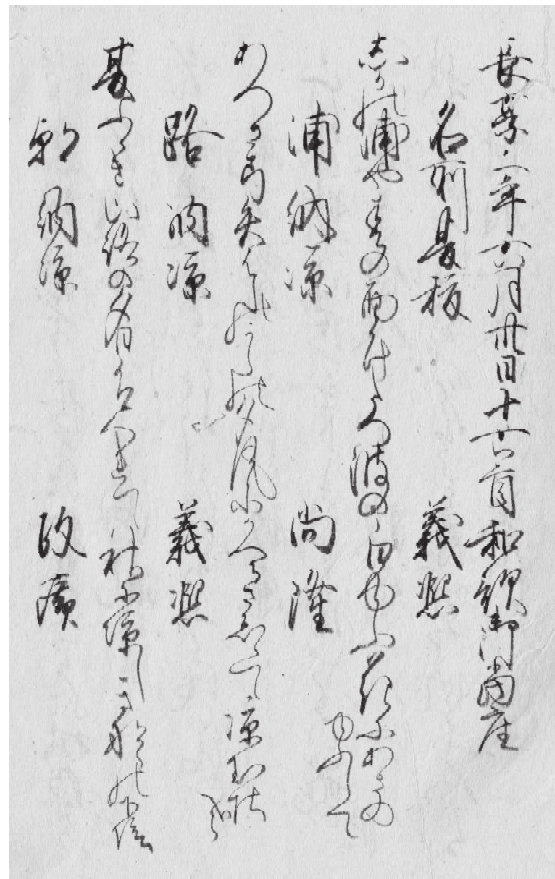
橋 政行

15 君かためつかふる人やこの比は わたりなれけん勢多の長橋

星 御か詠「二

16 四方にみつほしのやとりに雲のこし はやふきかへし空もはれなん  
(以下空白)

〔巻頭〕



橋 政行

君かためつかふる人やこのころは わたりなれけんせたの長はし

星 御詠

四方にみつほしのやとりに雲のこし はやふきかへし空もはれなん  
(以下空白)「二

〔巻頭〕

